

大学生の親性準備性と親への認知

——親子関係と父親の家事・育児従事度への認知に焦点をあてて——

松本 晴香*・桂田恵美子**

抄録：本研究は、親性準備性を高める親子関係の検討、父親の家事・育児が親性準備性に与える影響の検討を目的とした。仮説1は、認知された親子関係が良好な大学生は、そうではない大学生に比べて親性準備性が高い、仮説2は父親の家事・育児従事度が高いと認知している大学生は、そうではない大学生に比べて親性準備性が高いであった。大学生（ $n=370$ ）を対象に調査を行った結果、両親との良好な関係は親性準備性を高めることが明らかになり仮説1は支持された。しかし、母親との関係・父親との関係に分け分析を行った結果、母親との関係性のみが親性準備性に影響を与えていた。仮説2は、女性の育児への積極性に父親の家事・育児従事度は影響を与えることが分かり、仮説は一部支持された。よって、娘にとって父親は将来の配偶者のモデルになっていて、父親が家事・育児に積極的であると将来の配偶者にも同じように家事・育児の参加が期待でき、育児に対してより積極的になれると考えられる。

キーワード：親性準備性、親子関係の認知、父親の家事・育児従事度

近年、核家族化や少子化などにより子どもと接する機会の少ないまま親になる若者がふえている。そのため、親になっても子どもとどのように接して良いのかわからない親が多いことが問題視されている（岡本・古賀, 2004）。このような現状を受けて、結婚前から親になる準備（親性準備性）が形成されていることが望ましいと考える。

「親性準備性」とは、知識・情緒・態度など親としての役割を遂行するためのレディネスであり、子どもへのイメージや関心・好意など「子供に関するもの」、子育てへの心構えや考えかた・意識・態度など「子育てに関するもの」、親志向性、自身の親への親和性・親への同一化など「親になることに関するもの」の3つからなる（岡本・古賀, 2004）。それでは、この「親性準備性」の形成にはどのような要因がかかわってくるのであろうか。川瀬（2010）は子育て体験が大学生の親性準備性を高めると報告した。ボランティア活動などで乳幼児と触れ合う・遊ぶといった子育て体験により、親になるイメージが明確になり乳幼児への好意感情が高まり、その結果として親性準備性も高くなると述べている。一方で、子育て体験がネガティブな印象を持つ場合、子育てへの負担感を感じる（溝端・武藤・桂田, 2010）や子育て経験は子供を好きになる反面、子育てへの否定的な感情も生じる（中嶋他, 2010）と述べている研究者もいる。

親性準備性を高める別の要因として親子関係がある。

小林（2014）は大学生を対象とした研究結果から、良好な親子関係の中で育ち、現在も両親との関係が良好である方が子どもをかわいいと感じ育児へ忌避感を抱かないため、親性準備性が高くなると述べている。また、親性準備性の男女差について検討した結果、男子は母親・父親両方の関係性が親性準備性に影響を及ぼすが、女子は母親との関係性のみが親性準備性の形成に影響を及ぼすとも述べている。そして、この親の影響を小林（2014）はロールモデルと Bowlby（1969）の愛着理論によって説明している。女子にとっては母親が親になる際のロールモデルであり、かつ愛着を築く対象であるため母親との関係性のみが親性準備性に影響を与えるが、男子は父親をロールモデルとし、母親と愛着関係を築くため父親・母親両方の関係が親性準備性に影響を与えると説明している。

しかし、女子の親性準備性に父親との関係性が影響を与えるとする研究者もいる。池田・西脇（2008）は青年期女子の母性準備性を高める要因は、母親・父親への肯定的な感情、親の育て方満足度、家事の手伝いだと述べている。また、立川・吉澤（2018）は、幼いころ及び現在の父親への好意感情が高い人ほど乳幼児への好意感情も高いと述べている。父親は娘にとってはじめて関わる異性であり、父親も親役割や結婚観・家族観に大きな影響を与えるのではないかと考えられる。そこで本研究では父親が親性準備性に与える影響について再度検討することにした。

*関西学院大学文学部4年

**関西学院大学文学部教授

溝端・武藤・桂田（2010）は男子大学生の子育て意識を規定する要因について検討した結果、平等な性別役割をもつ男子大学生は子育てに対して積極的かつ肯定的であることを明らかにした。また、男子大学生において幼少期の父親との関わりの中で「生活習慣・しつけ」に関することが子育て意識を高めるうえで重要だと述べている。ここから、父親の家事・育児従事度が子どもの親性準備性に影響を与えるのではないと思われる。ロールモデルの観点から父親の家事・育児従事度は特に男子（息子）に影響が大きいと考えられる。父親が積極的に家事・育児に関わる姿を見て育った男子はより平等的な性別役割観を持っている可能性が高く、親準備性が高くなるだろう。女子にとっても父親は配偶者としてのモデルとなり、家事・育児従事度が高い父親を見て育つことは、女子の親になることの負担感を軽減するのではないかと考える。なぜなら、男性（夫）に比べ女性（妻）は親になることでの制約・負担が大きいという意識を持っていることを報告している研究（佐々木・植田・鈴木・前田・片山，2004）があるからである。また、育児は幼少期のしつけでもあり、そのかわりの多さは後に子どもの親性準備性を高める要因になりうる。ここから、家事・育児従事度が高い父親のいる家庭で育った子ども（息子・娘）は親性準備性が高くなると予測した。

以上のような背景から、本研究では、親性準備性と親子関係や、父親の家事・育児従事度の認知との関連を検討した。先行研究を基に、1. 認知された親子関係が良好な大学生は、そうではない大学生に比べて親性準備性が高い、2. 父親の家事・育児従事度が高いと認知している大学生は、そうではない大学生に比べて、親性準備性が高い、という2つの仮説を立てて検証した。

方 法

調査対象者

関西学院大学に在籍する学生に質問紙を配布し、370名から回答を得た。その中で調査内容に記入漏れがなく、親役割観の文化の差を考慮し留学生を除いた351名（男性106名、女性243名、その他2名）のデータを分析対象とした。

調査内容

本調査で用いた質問紙は、フェイスシート、親性準備性評価尺度、親子関係の認知評価尺度、父親の家事・育児に関する質問、子どもとの関わりについての質問で構成されていた。

(1) フェイスシート

フェイスシートには、学部・学年・年齢・国籍・性別についての記入を求めた。国籍は留学生のみに尋ねた。

(2) 親性準備性評価

親役割を果たすための準備性を評価する尺度として佐々木（2007）の親性準備性尺度を用いた。この尺度は、「乳幼児への好意感情」9項目と、「育児への積極性」15項目の2つの下位尺度から構成されている。本研究では佐々木（2007）が「育児への積極性」の項目として不適当だと指摘した2項目を除いて分析を行った。それぞれの項目に対し、「あてはまる」（5点）～「あてはまらない」（1点）の5段階評価で回答を求め、逆転項目を処理し合計得点が高いほど親性準備性が高いとした。本研究における尺度の信頼性を確認するために、Cronbachの α 係数を算出したところ、乳幼児への好意感情（9項目）は $\alpha=.96$ 、育児への積極性（13項目）は $\alpha=.71$ 、親性準備性（22項目）は $\alpha=.90$ であった。

(3) 認知された親子関係の評価尺度

子から見た現在・過去の親子関係に対する評価には、小林（2014）が作成し使用した認知された親子関係尺度を用いた。この尺度は「子供時代の両親についての印象」17項目、「現在の父親・母親についての印象」8項目、合計25項目で構成されている。この項目に対し、「あてはまる」（5点）～「あてはまらない」（1点）の5段階評価を求め、その合計得点が高いほど良好な親子関係を認知していることを表す。小林はこの尺度の因子分析を行い、「子どもの頃と現在の父親との関係（13項目）」、「子どもの頃と現在の母親との関係（12項目）」の二つの因子に分けた。本研究でも父親・母親のロールモデルの観点から、親子関係の認知（両親との関係）と父親・母親それぞれとの関係認知の3点で分析を行った。どの尺度得点も高得点は良好な関係を表す。信頼性を確認するために Cronbach の α 係数を算出したところ、両親との関係尺度は $\alpha=.90$ 、父親との関係尺度は $\alpha=.77$ 、母親との関係尺度は $\alpha=.86$ と高い信頼性が確認された。

(4) 父親の家事・育児に関する質問

子どもからみて父親がどれほど家事・育児に協力しているかを評価するため、ゼミで事前調査を行い、父親の家事・育児従事度評価尺度を作成した。その手続きとしては、学生14名に父親が家事・育児にかかわった具体例を自由記述してもらい家事・育児それぞれ高頻出の項目を抽出した。その結果、「料理をする」・「お風呂掃除をする」など家事7項目、「私が子どもの頃、よく遊びにつれていった」・「私が子どもの頃、保育園や幼稚園に送り迎えしていた」など育児4項目の合計11項目を選択し尺度を構成した。この項目に対し、「あてはまる」（5点）～「あてはまらない」（1点）の5段階評価を求め、その合計得点が高いほど父親が家事・育児に積極的に従事していることを認知しているとした。本研究における尺度の信頼性を確認するために Cronbach の α 係数を算

出したところ、 $\alpha = .86$ と高い信頼性が確認された。尚、この尺度は付録として掲載した。

(5) 子どもとの関わりについての質問

子どもとの関わりが親性準備性に影響を与えるため、小学生以下の子どもと関わった経験について尋ねた。経験の有無とその経験の印象（経験がポジティブなものであったか、ネガティブなものであったか）を尋ねた。そして、経験がない場合を 0 点、経験がある場合それに対し抱いた感情がポジティブかどうか 1～5 点の 5 段階評価とした。つまり、得点が高いほど子どもと関わった経験がポジティブであったことを意味する。

手続き

関西学院大学の心理学の 1 年次と 3 年次の授業時間の一部を使って、質問紙に回答してもらった。

結 果

本研究で使用した各尺度の平均値、標準偏差 (SD)、最小値、最大値を Table 1 示した。また、Table 2 に各尺度における男女別の平均値と標準偏差 (SD) を示した。

尺度ごとの合計点に性差があるかどうかをみるために t 検定を行った。その結果、親性準備性得点 ($t(349) = 2.75, p < .01$)、親子関係の認知得点 ($t(204) = 2.69, p$

$< .01$)、子どもと関わった肯定感得点 ($t(193) = 2.63, p < .01$) において男性より女性の方が平均点が高く有意な差がみられた。

各変数の相関分析

各尺度の関連性を検討するために相関分析を行った。その結果を Table 3 に示す。親性準備性と、親子関係の認知・母親との関係・父親との関係・子どもと関わった肯定感の間に有意な正の相関がみられた。また母親との関係と、父親との関係・父親の家事・育児従事度の間に有意な正の相関、父親との関係と父親の家事・育児従事度の間に有意な正の相関がみられた。

親子関係(母親と父親)の認知が親性準備性に及ぼす影響

(1) 男女混合を対象とした分析

親性準備性を目的変数、親子関係の認知、父親の家事・育児従事度、子どものかかわり経験の肯定感、年齢を説明変数とする重回帰分析を行ったところ、 $R^2 = .246, p = .000$ と有意な回帰式が得られた。また、説明変数の一つである親子関係の認知を母親との関係、父親との関係に分けて説明変数とし、同様の重回帰分析を行ったところ、 $R^2 = .246, p = .000$ と有意な回帰式が得られた。多重共線性の値 (VIF) はすべて 1.5 より小さく、

Table 1 各尺度の平均値と標準偏差 (SD)、および最小値、最大値

全学生	親性準備性	親子関係の認知	父親の家事・育児従事度	子どもとの関わり経験の肯定感
平均値	78.95	95.27	34.51	2.50
標準偏差	16.5	15.33	10.31	2.19
最小値	39	40	11	0
最大値	106	122	55	5

Table 2 各尺度の男女別の平均値と標準偏差

	親性準備性	親子関係	父親家事	子ども肯定感
男性	76.15 (14.87)	91.97 (14.98)	35.15 (10.92)	2.06 (2.21)
女性	86.44 (14.07)	96.7 (15.35)	34.27 (10.08)	2.69 (2.16)

() 内の数値は標準偏差

Table 3 各尺度の相関分析

	年齢	親性準備性	親子関係の認知	母親との関係	父親との関係	父親の家事・育児従事度	子どもとの関わり経験の肯定感
年齢	1.000						
親性準備性	-.040	1.000					
親子関係の認知	-.056	.374**	1.000				
母親との関係	-.046	.397**	.147**	1.000			
父親との関係	-.070	.255**	.130*	.510**	1.000		
父親の家事・育児従事度	-.102 +	.098 +	.362**	.179**	.432**	1.000	
子どもとの関わり経験の肯定感	.110*	.355**	.093 +	.101 +	.037	-.006	1.000

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

Table 4 親性準備性の重回帰分析

目的変数	説明変数	β	t	
親性準備性	親子関係の認知	0.349	6.87	***
	父親の家事・育児従事度	-0.031	-0.61	
	子どもとのかかわり経験の肯定感	0.329	6.92	***
	年齢	-0.048	-1.06	
$R^2 = .246$, 調整済み $R^2 = .237$, $p = .000$				
親性準備性	母親との関係	0.326	5.86	***
	父親との関係	0.059	0.97	
	父親の家事・育児従事度	0.010	0.20	
	子どもとのかかわり経験の肯定感	0.324	6.87	***
	年齢	-0.050	-1.06	
$R^2 = .246$, 調整済み $R^2 = .253$, $p = .000$				

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

Table 5 男性対象の親性準備性、乳幼児への好意感情、育児への積極性の重回帰分析

目的変数	説明変数	β	t	
親性準備性	母親との関係	0.350	3.53	***
	父親との関係	0.181	1.62	
	父親の家事・育児従事度	-0.116	-1.24	
	子どもとのかかわり経験の肯定感	0.333	4.11	***
	年齢	0.039	0.48	
$R^2 = .372$, 調整済み $R^2 = .341$, $p = .000$				
乳幼児への 好意感情	母親との関係	0.259	2.44	*
	父親との関係	0.143	1.20	
	父親の家事・育児従事度	-0.131	-1.31	
	子どもとのかかわり経験の肯定感	0.350	4.04	***
	年齢	0.023	0.26	
$R^2 = .282$, 調整済み $R^2 = .246$, $p = .000$				
育児への積極性	母親との関係	0.401	3.99	***
	父親との関係	0.193	1.72	+
	父親の家事・育児従事度	-0.066	-0.69	
	子どもとのかかわり経験の肯定感	0.227	2.78	***
	年齢	0.053	0.65	
$R^2 = .361$, 調整済み $R^2 = .329$, $p = .000$				

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

問題はないと判断した。その結果を Table 4 に示す。Table 4 からわかるように親性準備性に対して、親子関係の認知と子どもと関わった肯定感がいずれも 0.1% 水準で有意な影響を及ぼしていた。また、親子関係の認知、子どもとのかかわり経験の肯定感のいずれも標準回帰係数 (β) は正であり、両親との良好な関係と子どもとのかかわり経験の肯定感は親性準備性を高める効果を示した。また、親子関係の認知を母親との関係、父親との関係に分けて分析したところ、母親との関係は 0.1% 水準で有意な影響を及ぼしていたが、父親との関係は有意な影響を及ぼしていなかった。

(2) 男女別の分析

親性準備性は性差が存在すると佐々木 (2007) は述べている。また、前述したように本研究でも多くの変数で

性差が明らかになったため男女別に同様の分析を行った。その際、親子関係の認知を父親と母親との関係に分けて説明変数に用いた。

男性 重回帰分析の結果を Table 5 に示す。Table 5 からわかるように親性準備性に対して、母親との関係と子どもとのかかわり経験の肯定感が 0.1% 水準で有意な影響を及ぼしていた。いずれも標準回帰係数 (β) は正であり、母親との良好な関係と子どもとの肯定的な関わり経験が親性準備性を高めることを示した。一方で、父親との関係は有意な影響を与えていないことが分かった。

親性準備性の下位尺度毎に分析しても、結果はほぼ同じであったが、「育児への積極性」においては母親との関係と子どもとの肯定的な関わり経験の他に、有意傾向ではあるが、父親との関係も影響を及ぼしていることが

Table 6 女性対象の親性準備性、乳幼児への好意感情、育児への積極性の重回帰分析

目的変数	説明変数	β	t	
親性準備性	母親との関係	0.303	4.43	***
	父親との関係	0.006	0.08	
	父親の家事・育児従事度	0.072	1.14	
	子どもとのかかわり経験の肯定感	0.315	5.31	***
	年齢	-0.098	-1.63	
$R^2 = .214$, 調整済み $R^2 = .198$, $p = .000$				
乳幼児への好意感情	母親との関係	0.167	2.42	*
	父親との関係	0.078	1.03	
	父親の家事・育児従事度	-0.002	-0.04	
	子どもとのかかわり経験の肯定感	0.359	5.96	***
	年齢	-0.234	-2.67	*
$R^2 = .185$, 調整済み $R^2 = .168$, $p = .000$				
育児への積極性	母親との関係	0.392	5.70	***
	父親との関係	-0.092	-1.23	
	父親の家事・育児従事度	0.162	2.35	*
	子どもとのかかわり経験の肯定感	0.163	2.71	*
	年齢	-0.020	-0.33	
$R^2 = .189$, 調整済み $R^2 = .172$, $p = .000$				

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

示された。

女性 女性を対象に男性と同様の分析を行った。その重回帰分析の結果を Table 6 に示す。Table 6 からわかるように親性準備性に対して、母親との関係と子どもとのかかわり経験の肯定感がいずれも 0.1% 水準で有意な影響を及ぼしていた。女性を対象とした場合も母親との良好な関係と子どもとの肯定的な関わり経験は親性準備性を高めることを示したが、父親との関係は有意な影響を与えなかった。そして「乳幼児への好意感情」においては、母親との関係と子どもとの肯定的な関わりの他に、年齢が 5% 水準で有意であった。年齢の標準回帰係数 (β) は負であり、年齢が高いほど乳幼児への好意感情が低くなることを示していた。「育児への積極性」に関しては、母親との関係と子どもとの肯定的な関わりの他に、父親の家事・育児従事度が 5% 水準で有意であった。

以上の重回帰分析の結果から、男女ともに親性準備性を高めるには、親子関係が良好であること、子どもとの肯定的な関わり経験が重要であるということが明らかとなった。親子関係の中では特に母親との関係が重要であるということも分かった。さらに、親性準備性を下位尺度ごとに見ると、影響するその他の要因が男女で違っていることも明らかにされた。「育児の積極性」では、男性は父親との関係が、女性では父親の家事・育児従事度も影響していることが示された。

考 察

本研究は、大学生の親性準備性を高める要因として親

子関係や父親の家事・育児従事度に焦点を当てて検討した。「認知された親子関係が良好な大学生は、そうではない大学生に比べて親性準備性が高い（仮説 1）」と「父親の家事・育児従事度が高いと認知している大学生は、そうではない大学生に比べて親性準備性が高い（仮説 2）」という二つの仮説を立て、質問紙調査を行った。

重回帰分析の結果、両親との良好な関係と子どもとの肯定的な関わり経験は親性準備性を高めるということが明らかとなり仮説 1 は支持された。これは、良好な親子関係の中で育ち、現在も両親との関係が良好である方が親性準備性が高くなることを示した小林 (2014) の研究結果と一致している。親性準備性得点の男女差では、女性の方が有意に高い得点であり、佐々木 (2007) の研究結果と一致した。このような性差は、やはり親役割は女性の役割であるという性役割観が大学生に深く内在化されている反映ではないかと考える。

一方で、男女別に重回帰分析を行った結果、親性準備性のモデルに性差はみられなかった。本研究では、男女ともに父親・母親との関係の中で、母親との関係のみが親性準備性に影響を与えるという結果が示された。これは小林 (2014) の Bowlby (1969) の愛着理論から母親との良好な関係性は親性準備性を高める要因であるという説明を裏付ける結果である。しかし、男性において父親がロールモデルのため、父親との良好な関係も親性準備性の形成に影響を及ぼすという説 (小林, 2014) は本研究では支持されなかった。ただ、男性の育児への積極性には有意傾向ではあるが、影響を及ぼしていたため、完全に否定できるものでもない。

仮説2については、重回帰分析の結果より女子の育児への積極性に父親の家事・育児従事度が影響を与えることが分かり、仮説は一部支持された。予測したように、娘にとって父親は将来の配偶者のモデルになっていて、父親が家事・育児に積極的であると将来の配偶者にも同じように家事・育児の参加が期待でき、育児に対してより積極的になれるのであろう。しかし、父親の家事・育児従事度が男性の親性準備性や育児への積極性に影響を与えていないことから、男子大学生にとって父親が直接的にロールモデルになっているとは言えないだろう。一方で、相関分析より、親子関係の認知と父親の家事・育児従事度に弱い正の相関がみられた。ここから、父親が家事・育児を積極的に取り組むことは、両親との関係性を良いものととらえることにつながると言える。よって、父親の家事・育児従事度が高い家庭で育つことは、直接親性準備性には関与しないが、親子関係が良好になることにつながり、間接的影響があると考えられる。

本調査の限界点は、参加者の家族構成を聞いておらず、親との関係性については参加者の判断に任せて回答してもらったことである。二人親家庭を前提として両親との関係性を質問しているので、家族構成を聞いて、サンプルをより限定すべきであったと思われる。また、調査対象者が一大学の学生に限られている事も限界点である。今後の研究においては、以上二つの点を改善して行く必要がある。

引用文献

- Bowlby, J (1969). Attachment and Loss Vol.1 Attachment New York: Basic Books. (ボウルビー, 黒田実郎・大羽奏・岡田洋子(訳) (1976) 母子関係の愛着理論① 愛着行動 岩崎学術出版社).
- 池田かよ子・西脇友子 (2008). 青年期女子の母性準備性について－家庭環境, 友人関係, 結婚観および出産観との関連について－ 母性衛生, 49, 48-56.
- 川瀬隆千 (2010). 大学生の親性準備性に関する研究 宮崎公立大学人文学部紀要, 17, 29-40.
- 小林 真 (2014). 認知された親子関係は大学生の親性準備性にどのような影響を及ぼすのか 富山大学人間発達科学部紀要, 8, 42-48.
- 溝端奈穂・武藤麻美・桂田恵美子 (2010). 男子大学生の子育て意識を規定する要因 関西学院大学臨床教育心理学研究, 36, 15-19.
- 中嶋律子・北川真理子・小笠原照彦・神田真愛・植松みほ・安藤えみ…近藤晴子 (2001). 高校生・大学生の親になることへの意識調査 名古屋市立大学看護学部紀要, 1, 93-99.
- 岡本裕子・古賀真紀子 (2004). 青年の「親性準備性」概念の再検討とその発達に関連する要因の分析 広島大学心理研究, 4, 159-172.
- 佐々木綾子 (2007). 親性準備性尺度の信頼性・妥当性の検討 福井大学医学部研究雑誌, 8, 41-50.
- 佐々木くみ子・植田 彩・鈴木康江・前田隆子・片山理恵 (2004). 親になる意識の構造とその影響要因に関する研究. 鳥取大学医学部保健学科米子医誌, 55, 142-150.
- 立川真紀・吉澤千夏 (2018). 大学生の乳幼児に対する好意感情－父母に対する好意感情との関連－ 上越教育大学研究紀要, 38, 159-166.

付録

あなたのお父さんの家事・育児参加度についてお尋ねします。

あなたの覚えている限り（過去・現在），以下の項目それぞれについて「1. あてはまらない」～「5. あてはまる」の中からあてはまる数字を選んで○で囲んでください。

	あてはまらない	ややあてはまらない	どちらでもない	ややあてはまる	あてはまる
1. 料理をする	1	2	3	4	5
2. 食器を洗う	1	2	3	4	5
3. 洗濯物をする（洗う・干す・畳むなど）	1	2	3	4	5
4. お風呂掃除をする	1	2	3	4	5
5. 部屋の掃除をする	1	2	3	4	5
6. 庭の手入れをする（草抜き・花の水やりなど）	1	2	3	4	5
7. ごみ出しをする	1	2	3	4	5
8. 子どもの頃，私をよく遊びに連れて行った	1	2	3	4	5
9. 私とよく一緒に遊ぶ・遊んだ	1	2	3	4	5
10. 私が子どもの頃，欲しいもの・必要なものがあるとき買い物に連れて行った	1	2	3	4	5
11. 私が子どもの頃，保育園や幼稚園へ送り迎えしていた	1	2	3	4	5